

## インタラクティブセッションA

### 【地域医療連携ツール「トレーシングレポート」の活用術を学ぶ！】

- <企画責任者> 鈴木 渉太 (京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系  
健康情報学 / 奈良県立医科大学附属病院 臨床研究センター)
- ファシリテーター 鈴木 渉太 (京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系  
健康情報学 / 奈良県立医科大学附属病院 臨床研究センター)
- ファシリテーター 岡田 浩 (京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系  
健康情報学)
- コメンテーター 莊子 万能 (BonBon 株式会社)
- コメンテーター 小林 正宜 (医療法人葛西医院)
- 演者・コメンテーター 庵原 伸也 (株式会社センター薬局グループ 上川店)

#### <企画概要>

<概要> トレーシングレポート (TR) は、医療機関と薬局を結び、両者のコミュニケーションツールとなりうる可能性を秘めている。TRに関する活動に取り組んでいる薬剤師、医師、研究者・起業家を中心に参加者を含めた全員で TR のより良い活用方法を考える。

<意図> 患者さんの健康増進には、多職種間でのコミュニケーションが不可欠である。TR は、薬剤師から医師へ情報を伝える手段のひとつであり、その活用により双方向的なコミュニケーションが期待される。しかし、これまでの調査では、薬剤師の作成した TR に対して、医師からの返信は多くない事が知られている。

この企画では、参加者全員で TR の書き方、受け取り方など使い方を考える機会としたい。また、企画者からは、TR を最大限に活用するため、これまで医師・薬剤師の意見をもとに開発した TREPO とその実装に向けた計画について紹介を予定している。



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会  
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association  
2022年6月11日(土) ~12日(日) | パシフィコ横浜

## インタラクティブセッションB

### 【リハビリテーション科医とプライマリ・ケア医コラボ企画

#### 活動を支える移動補助具・装具について学ぼう】

<企画責任者> 鵜飼万実子（亀田ファミリークリニック館山）

代 表 鵜飼万実子 （亀田ファミリークリニック館山）

副代表 須田 万豊 （慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室）

演 者 松浦 広昂 （藤田医科大学医学部リハビリテーション医学 I 講座）

演 者 望月 亮 （聖隷袋井市民病院リハビリテーション科）

演 者 原嶋 渉 （伊勢原協同病院リハビリテーション科）

演 者 大野 洋平 （川崎市立井田病院緩和ケア内科）

#### <企画概要>

「転ばぬ先の杖」とよく言われるほど、私たちは古くから杖に親しんでいます。プライマリ・ケア医は、移動補助具・装具を使う方に出会おうと思います。最近は次世代型電動車椅子なども登場し、超高齢社会を迎える日本ではモビリティのあり方は注目されつつあります。やがては私たちも老いて、これら生活必需品のお世話になるでしょう。しかし、これまで活動を支える移動補助具・装具に関して学ぶ機会はほとんどありませんでした。

- ・ そういえば、患者さんは杖をどこで買うのだろう。
- ・ 「装具が壊れた」と患者さんから相談されたけど、どうすればいいのだろう。
- ・ シルバーカーを使っているのに転んでいると患者さん家族から言われたけど、どうしよう。

今回のリハビリテーション科医とプライマリ・ケア医コラボ企画では生活必需品となる杖・車椅子・装具といった、活動を支える“移動補助具・装具”について学んでいきます。福祉用具に関して専門知識を持つリハビリテーション科医より、明日からのプライマリ・ケア診療が楽しくなる移動補助具・装具の見かた、考えかたを伝授いたします！

## インタラクティブセッションC

### 【プライマリ・ケア医のための 透析診療ハンズオンセミナー】

<企画責任者> 坂井 正弘（東京ベイ・浦安市川医療センター

腎臓・内分泌・糖尿病内科）

座長 高野 敬佑（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

監修 鈴木 利彦（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 池田 達弥（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 鈴木 康浩（東京ベイ・浦安市川医療センター 臨床工学室）

演者 北村 浩一（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 吉野かえで（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 坂井 正弘（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 遠藤 慶太（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 原 裕樹（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

演者 三宅 晃弘（東京ベイ・浦安市川医療センター 腎臓・内分泌・糖尿病内科）

#### <企画概要>

「増えが多くてドライ行かないので、イーカム追加しますか？」「ご飯は何を食べればいいですか？」

急性血液浄化から透析アルバイトまで、透析診療への苦手意識を克服するためのプライマリ・ケア医向けセミナーを受講しませんか？

冒頭で透析原理を簡単に説明し、ルーチンで診るべき体液量・血圧、貧血、骨・ミネラル代謝異常（MBD）の評価法・プレゼンテーション、バスキュラー・アクセスの解説を行います。実際の透析記録や透析機械の操作をお見せして、目の前の患者でどんな透析が行われているかをすぐに把握できるようにします。アドバンスレクチャーとして透析効率・不均衡症候群・透析中の抗凝固薬について、トラブルシューティングとしてアクセストラブルや血圧低下などについても触れます。プライマリ・ケア医が、明日から自信を持って透析診療に関わるために、極めて実践的かつ必要十分な内容とします。

- ざっくり理解する 透析原理とHD・CRRT 処方の概要
- 透析回診で診るべきポイントと効率的なプレゼンテーション法
- 透析表・透析記録と、透析機の操作
- よくあるトラブルシューティング



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会  
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association  
2022年6月11日(土)～12日(日) | パシフィコ横浜

## インタラクティブセッションD

### 【苦手意識を克服！がんのプライマリ・ケア遺伝診療】

<企画責任者> 鳴本敬一郎

(静岡家庭医養成プログラム(浜松医科大学総合診療プログラム) /

森町家庭医療クリニック / 浜松医科大学産婦人科家庭医療学講座)

司会・演者 鳴本敬一郎

(静岡家庭医養成プログラム(浜松医科大学総合診療プログラム) /

森町家庭医療クリニック / 浜松医科大学産婦人科家庭医療学講座)

演者・講師 岩泉守哉 (浜松医科大学臨床検査医学講座)

演者・講師 小島梨紗 (浜松医科大学医学部附属病院遺伝子診療部)

#### <企画概要>

がん全体の5~10%を占める遺伝性腫瘍は、若年層や家族のがん発症リスクを大きく増加させる。中でも頻度の高い遺伝性乳癌卵巣癌症候群(HBOC)やリンチ症候群(LS)では、一般的に推奨されるがん検診とは異なるがんのサーベイランス方法が提唱されており、またHBOCではリスク低減手術や化学予防による発症予防のエビデンスが確立されている。そのため、プライマリ・ケア(PC)医は、家族歴に基づく適切なリスク評価と拾い上げ、そして遺伝子診療部への紹介が重要とされる。しかし、遺伝性腫瘍の臓器横断的にがんが発症する性質や、PCの特性から、遺伝診療の実践を困難に感じるPC医は多い。本セッションではHBOCやLSを中心に、(1)最低限必要な遺伝学用語、(2)がんのリスク評価ツール、(3)がんのゲノム医療の現状(遺伝学的検査の保険適用を含めて)について理解し、(4)PCと遺伝子診療部との連携、(5)PC医が遺伝診療を実践する意義について考察を深めることを目標とする。



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会  
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association  
2022年6月11日(土) ~ 12日(日) | パシフィコ横浜

## インタラクティブセッションE

### 【ひとり開業医でもできる！一歩すすんだ卒前卒後の診療所教育】

<企画責任者> 高木 博（みぞのくちファミリークリニック/

筑波大学総合診療グループ）

司 会 高木 博（みぞのくちファミリークリニック/

筑波大学総合診療グループ）

演 者 北西 史直（トータルファミリーケア北西医院）

演 者 富田さつき（富田医院）

演 者 松村 真司（松村医院）

演 者 岡崎 史子（東京慈恵会医科大学 教育センター・臨床研修センター）

#### <企画概要>

目的：地域で活躍する開業医を対象に、より質の高い卒前卒後教育を普及することを目的とする。

概要：診療所で最前線で地域医療に携わっている中で、医学生の診療所実習や地域基幹病院の初期研修医の診療所実習（研修）を受け入れることがあります。いわゆるソロプラクティスのひとり開業医では、どうしても見学型の実習・研修になりがちですが、診療所内外の医療職との連携や工夫でより質の高い教育ができます。本企画では、PCFMネットワーク（プライマリ・ケア・家庭医療の見学実習・研修を受け入れる診療所医師のネットワーク）でもご活躍の北西史直先生、富田さつき先生、松村真司先生に診療所での卒前卒後教育の実例を通してディスカッションしていきます。また特別ゲストに岡崎史子先生をお迎えし、卒前卒後教育についての悩みや疑問について専門家の立場からお答えいただきます。本企画は、全国の開業医が熱い気持ちで医学生および初期研修医への質の高い診療所教育を提供できることを目指します。



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会  
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association  
2022年6月11日(土)～12日(日) | パシフィコ横浜

## インタラクティブセッションG

### 【日常診療にある倫理】

<企画責任者> 本村 和久（沖縄県立中部病院）

司 会 本村 和久（沖縄県立中部病院）

演 者 三浦 靖彦（東京慈恵会医科大学）

演 者 矢吹 拓（国立病院機構 栃木医療センター）

演 者 大浦 誠（南砺市民病院）

演 者 川口 篤也（道南勤医協 函館稜北病院）

演 者 北西 史直（トータルファミリーケア北西医院）

演 者 中村ゆかり（調布東山病院）

### <企画概要>

倫理とは「品行方正とか清く正しく」という印象があるかもしれませんが、「何か正しいと思われることをきちんと行うこと＝倫理ではなく、現実の出来事をどう行えばよいのかをふかえりつつ、次の行動を模索するのが倫理的な態度」であると考えています。人工呼吸器を止めるかどうかという命を左右する問題から、何気ない日常診療の中にも倫理的問題はつねに存在します。本委員会ではインターラクティブセッションとして「日常診療にある倫理」について、臨床倫理の理論から実際の事例検討まで皆様と積極的な幅広く議論を行う場を設定しました。医療者としてプロフェッショナリズムを振り返る機会になればとも思っています。ぜひご参加下さい。

## インタラクティブセッションH

### 【家庭医療・総合診療専門研修での Workplace-based learning】

<企画責任者> 横谷 省治（筑波大学医学医療系 地域総合診療医学／

北茨城市民病院附属家庭医療センター）

司会・演者 横谷 省治（筑波大学医学医療系 地域総合診療医学／

北茨城市民病院附属家庭医療センター）

演 者 和田 幹生 （金井病院 家庭医療センター）

演 者 日比野将也 （藤田医科大学 救急総合内科学講座）

演 者 藤原 和成 （出雲家庭医療学センター 大曲診療所）

企 画 大島 民旗 （西淀病院／大阪家庭医療センター）

企 画 鄭 東孝 （国立病院機構東京医療センター 総合内科）

企 画 山田 康介 （北海道家庭医療学センター／更別村国民健康保険診療所）

企 画 森永 太輔 （つむぎファミリークリニック）

#### <企画概要>

専門研修プログラムにおいて、研修現場（＝職場）では「働くこと」と「学ぶこと」の葛藤が生じがちである。業務には明確な成果を求められる一方、学びは成人学習理論によれば内発的動機付けによるものである。どんな経験も学びになると自らを納得させて、ひたすら業務にいそしむ専攻医もいるかもしれない。「働くこと」と「学ぶこと」の対立を包含しつつ、どのような学びの仕組みを作ると良いか、多くの指導医が悩むところと思われる。workplace-based learningでは、振り返りやポートフォリオ作成を含む on-the-job training と、レクチャーやワーク等の off-the-job training、学習成果の評価法など、「働くこと」と「学ぶこと」を繋げ実践と理論を結びつける工夫が必要である。本セッションではこれらをどう現場に実装していくか、また研修プログラムとして職場（研修先）とどうコミュニケーションを取っていくかに焦点を当てる。実践例の紹介も交えつつ、悩める指導医同士で学び会えるセッションにしていきたい。主に学会認定指導医対象（認定更新のための指導医養成講習会受講単位 1.5 単位）だが、関心のある専攻医、他職種の参加も歓迎。セッション中に簡単なワークの提出あり。

## インタラクティブセッションⅠ

【日本版「へき地尺度」の開発と活用：

尺度作成過程の共有とへき地医療の更なる発信に向けて】

＜企画責任者＞ 金子 惇（横浜市立大学）

座 長 金子 惇（横浜市立大学）

シンポジスト 長嶺由衣子（東京医科歯科大学東京都地域医療政策学講座）

シンポジスト 佐田 憲映（高知大学 臨床疫学講座）

シンポジスト 杉山 佳史（東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター

臨床疫学研究部）

＜企画概要＞

皆さんは、「へき地」「へき地医療」という言葉から、どんな景色を思い浮かべるでしょう？ 離島？ 雪に閉ざされた山間地域？ 人によってイメージが異なることと思います。そもそもどこからが「へき地」なのかも明確には決まっていません。諸外国では、都市部に比べへき地の方が生活習慣病などの慢性疾患を持つ方が多い、医療へのアクセスが悪い、社会経済的に厳しい状況の方が多など報告されていますが、わが国ではその様な報告をするために必要な医療分野における「へき地」の定義や尺度が存在しません。「へき地医療」の研究、記述、情報発信を行おうとする際には常に「へき地」の定義や程度が問題になります。分かりやすく、多くの人に使いやすい「へき地尺度」があれば研究発信が進み、現状を共有しやすくなると考えられます。本セッションでは、島嶼及びへき地医療委員会メンバーを中心に作成した「へき地尺度」についてレクチャー及び対話形式で分かりやすく説明します。まず最初に、20分程で先行文献のスコopingレビュー、デルファイ法を用いた住民を含むステークホルダーの合意形成、実際の尺度作成、妥当性の検証など尺度の作成のプロセスを共有します。その後、シンポジストの皆さんと共に対話を通じて尺度への理解を含めながら、今後のへき地医療研究の可能性について一緒に考えていきます。